

岩田慶治・アジアを語る

— フィールドの経験と自画像 —

野間 晴雄

一 はじめに—二〇年前の鼎談—

岩田慶治（一九二二年一月二日—二〇一三年二月一七日）は戦後初の東南アジアの海外調査に参加した第一世代である。ラオス、タイ、ボルネオや南アジアのインド、スリランカ、ネパール、ブータンなどのインテンシブ、エクステンシブな村落調査・観察から、独自のアニミズム論を展開したことで知られる。国立民族学博物館の研究部長や第八期（一九七八—七九年度）日本民族学会会長の公職を歴任した著名な研究者ではあるが、七〇年代以降の欧米の文化人類学の主潮とは一線を画してきた。また、この世代は、戦間期に学籍を残したまま従軍経験がある。その前後の世代の研究者が欧米の大学に留学や文部省の派遣による海外遊学の経験をもつのに対して、岩田の世代はそれが叶わなかった。

日本の地理学界では、国を巻き込んで、ドイツの地政学や政治

地理学が紹介され、その日本的な展開が半ば煽情的に繰り広げられた。学生の卒業論文も日本を対象とする実証研究はまかりならんと教室から言い渡された異常な時代であった。アジアをはじめ海外諸地域を対象として、外国文献を資料とした地政学的研究をやらざるを得なかった苦渋の選択を学生は迫られていた。^①

岩田の独自の学問や宗教観は狭い文化人類学の範疇にはおさまりきれない知の広がりをもっている。その一方で、多くの一般人にさまざまな著作を通じて知られてはいたが、孤高の人類学者という評価もあった。それが没後、一〇年経って、存在論的人類学（Ontological Anthropology）や存在論的転回（Ontological Turn）という二〇一〇年代以降の流れの中で再評価されてきたという。^②

二〇二二年一二月、松本博之・関根康正編『岩田慶治を読む—今こそ〈自分学〉への道を』京都大学学術出版会^③、が江湖にでた。このユニークな著作は、二〇一三年一〇月一九日に吹田の国

立民族学博物館での岩田慶治先生追悼シンポジウム「草木虫魚と向きあう」の発表内容がもたっている。ただ、その後の一〇年という時間のなかで、書誌情報がより詳細・正確になり、諸論考も近年の研究の流れを踏まえてリニューアルしている。さらに、松本と関根が、故・野村雅一（一九四二—二〇一七）・赤阪賢らとともに、二〇一三年六月一日に京都市で開催した「岩田先生を語る会」の録音の編集記録や、一九九五年に講談社から刊行された『岩田慶治著作集』全八巻の付録である「月報」の一部を松本が編集再録している。さらに、示唆に富む解説を付した第五章「岩田慶治「自分学」の地平——【岩田慶治著作集月報より】もきわめて興味深い内容となっている。

本書は、二〇一三年一〇月の追悼シンポジウムの主要なシンポジストの論考や年譜、研究業績、岩田自身が撮影した東南アジアの一九五〇年代の写真、岩田から直接に教えをうけた編者二人の論考、岩田の著作からしか氏を知らない二名の気鋭の文化人類学者である長谷千代子、西垣有による、岩田の人類学の解剖の四論文が中心となっている。いずれも、近年の文化人類学の動向や方法論を多方面から考察しながら、岩田の思想に肉薄している。さらに第二編には、氏の著作目録や岩田自身が撮影した東南アジアの写真が、いくつかのタイトルを付して掲載されている。

私はこのユニークな著作の書評を依頼されているので、本稿では、岩田氏の八三歳のときに語った記録をそのまま掲載すること

を主たる目的とした。

この「語り」は、氏とほぼ同世代の京都大学文学部の地理学出身で、民族学・人類学あるいは文化地理学に顕著な業績をあげた川喜田二郎（一九二〇—二〇〇九）、大島襄二（一九二〇—二〇一四）の鼎談の記録の一部である。人文地理学会アジア研究部会の例会として、京都市内（京大会館）で記録された。紙幅の関係で岩田の部分のみを録音から文字起こしをした原稿をもとにしている。私が注や若干のコメントをつけたが、本稿は資料としての提示が中心となっている。その思想の考察までには及んでいない中間的な報告である。

例会当日は三氏を知らない若手・中堅の研究者や大学院生、三氏に同僚としてかわりをもった民家研究の杉本尚次（一九三一—二〇二二）、チベット研究の高山龍三（一九二九—二〇一九）など五〇名近い参加者を得た。とりわけ、岩田、川喜田の二人は、村松繁樹を主任教授とした草創期の大阪市立大学地理学教室の若手スタッフであったし、その直接の教えをうけたのが松本博之（大阪教育大学・奈良女子大学名誉教授）や山野正彦（大阪市立大学名誉教授、もと人文地理学会会長）である。

本稿に掲載した資料は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究B「地理学を核としたアジア地域研究のデータベースと研究者ネットワークの構築」（課題番号 一四三九〇〇三五、二〇〇二—二〇〇三年度、研究代表者 野間晴雄）によって、二〇〇四年当

時の録音記録の筆稿をもとにしている。以下の資料は人名やその生年を筆者の方で補い、小見出しをつけて、補足の注や「」をつけた。話題提供のあとには、質疑応答も発言者の名前、当時の所属を付している(図1)。

筆者は長らく公表してこなかったアジア地域研究者の記録を、この紀要でこれまで二人掲載してきた。ひとり是中国研究の河野通博⁽⁴⁾、もうひとり朝鮮・韓国研究の樋口節夫⁽⁵⁾である。この拙稿



図1 アジアを語る岩田慶治氏
(2004年3月20日、京大会館にて、野間撮影)

はその第三報にあたる。

一 岩田慶治の語り

岩田慶治の略歴紹介と青春時代の遍歴

松本博之(奈良女子大学) それでは、若い皆さんがおられますので、最初に岩田先生についてご紹介させていただきます。

岩田先生は一九四八年九月に京都大学文学部史学科をご卒業になられて、それ以後、一九四八年からずっと、このように膨大なものを執筆なさってこられました。ただ、卒業論文はオーストラリアのアルンタ族の地域⁽⁶⁾にかかわるものでしたかね。

岩田慶治 そうです。私はオーストラリアのアルンタ族の地域観というか、彼らにとつての地域というものを探ったのです。

松本 ぼくはそこでなんでアルンタ族だったのかという、そのへんのところも今日はお聞きしてみたいなと思ったりしていたんです。最初のこれ「年譜資料」でわかりますように、アフリカのご研究というのが、当時のひとつのメイン・テーマでした。それと並行するかたちで、資料にありますように、一九世紀のドイツ地理学史、その地理学史のなかでも近代地理学の創設者といわれていますフンボルトとリッターについてのご研究されてきたわけですね。

岩田 それと並行するかたちでというか、ロバート・レッドフィールド(Robert Redfield)⁽⁷⁾や、レイモンド・ファース(Raymond

「Fritz」等の本を読みました。そういうえば、どちらかと言うとア
ンソロポロジの分野ですね。その後、たとえば「砺波地方にお
ける双分組織の問題」などにむすびつく本を読んだわけです。

松本 一九五七年ですかね、稲作民族文化総合調査団に加わるこ
とになったのですね。

岩田 声が出ないですね。仕方なしに、一昨日から吸入器を買っ
てきて毎日吸入しているんです。すこしはよくなったと思うんだ
けれども。それで何を言うのか自分でも分かりませんけれど、い
ま松本さんがいろいろ言ってくださったので、それに続けて話を
してみますか。

旧制高等学校¹⁰のとき、日本語で書かれた地理学の本はすべて読
んだんです。自分でそれらを読んで、「地理学の限界について」
というレポートを書いたことがあるんです。それを先生に出した
ところ、——『京都大学地理学論叢』でしたか、「こういうもの
があるから見てごらん」と言われました。小牧「実繁」先生など
が書いていたけれどもね。どうして僕にこれを読めと言うんだろ
うって不思議に思ったんです。問題意識としては分かるのです
が、そればかりが先行しているように思いました。味も匂いもな
かった。もともと小牧先生とは「京都市内の」理髪店が同じなの
でよく会ってお家までお送りしたこともあります。先生の立場は
分かりました。

そういうわけで、借りた本はすべて読みました。それで書いた

レポートが「地理学の限界について」です。まず私としては、こ
れまでの地理学のなかで、もっとも大きな学問体系というものを
つくったカール・リッター (Carl Ritter) とかアレクサンダー・
フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt)、この二人にな
ぜかとても惹かれて、先ずはこの二人について勉強しようとい
うことになった。どっちからやろうかというときに、ほくはリッ
ターから読み始めた。ところが、ものすごく難しい。プンクト(句
点)が一ページに一つもないんですよ。どこで止まってもいいか
わからないじゃないですか。だけど、そんなことを言ってもしよ
うがないから、わからないときは本を全部もう一回ペンで写しな
おして、それでも一回読んでね。無理して無理して、考え考えし
ていたんです。本を写し取ったって、一冊が二冊になるだけだす
よね。

それで、次にフンボルトをやることになったら、すこしはドイ
ツ語が楽になってね。カール・ブルーンズという人の『アレクザ
ンダー・フォン・フンボルト云々』という伝記があって、だから
ひじょうにやりやすかった。リッターのほうも伝記はあるんだけ
れども——あれはなんと言ったかな、名前を忘れたけど、そんな
ことをくりかえしたんです。

みなさんどう思いますか。学問というのは、たとえば地理学の
場合だったら、フンボルトとかリッターとかいう巨人がいるでし
ょう。ああいう人がいる学問というのは、いい学問だと思えます

ね。はじめに全体像がとらえられる。

ぼくは六三歳で国立民族学博物館を辞めて、「京都にある」^① 谷大学にきました。仏教集団には興味はないんですが、自分の行っている学校のいちばん原点として、そこに親鸞という人がいると、親鸞の本を読んで何となしに安定感をえましたね。『教行信証』を読んでも、わかったようでわからないところが多いし、ほとんどわからないと言ったほうが本当かもしれないけれども、そういう人がいちばん初めにいるということは、何となしに頼りがいがあるんですよ。なにも勉強しなくてもね。

ぼくは曹洞宗の道元という人がとても好きで、大学に入る前から、あの人の本を——ものすごく難しいんだけど、何度も何度も読んでいます。思いがけないときにわかってることがあるんですね。道元がこうおっしゃったということが、自分の手足の動きとともに分かってくる。

ところが、これらの人に匹敵するような大地理学者という人はいないですね。そこで地理学の人はあまり頼りにならないんですよ。つまり、典型があるいは整った体型がないんじゃないかな。まあ、どうでもいいけどね（笑）。

そうして何十年か過ぎて、今日こういう場所で話せと言われても、無理だという結論になるのです。言うほうが無理だと。だって五〇年としてご覧なさい。五〇年ああでもない、こうでもない。こうでもない。ああでもない。ああ書いたり、こう書いた

り、途中で消したりね。それをやってきて、要約して話せといわれても、どう話したらいいんですか。話せないですね。

そうしたら、さっきのご紹介によると、「お前は一九五七年、東南アジアの調査にでかけたろう、そのことでも話してみたらどうか」と言われまして、それはそうかも知れないと思ったんですが。その話に移ります。

東南アジアのフィールド調査

いちばん初めに行ったときは、慶応大学の松本信廣^②という先生が団長で行ったんです。われわれの中では、いまは辞めているけれども、筑波大学の綾部「恒雄」^③君がいちばん若かったけれどもね。それで東南アジア調査にでかけて、最初はメコン川を遡るということで行ったのです。それをずっとこのあいだから考えているんです。最初にメコン川、つぎにメナム「チャオプラヤ川」川、それから今度はカンボジアのほうに行くと、あそこのドン・レークという山の北側は、川がないんですよ。だから何川って言えないけどね。小さい池があちこちにあって、それに沿って村があります。日本でいえば岡山県ですかね。

それから、そのつぎはボルネオ「カリマンタン」に行ったんですよ。その前にマレー半島も行った。ボルネオに行って、その川、ミリ「東マレーシアのサラワク州の都市、オイルタウンである」というところから川が南のほうにのびています。その川をさ

かのぼって、その川の中流の「ロング・サン」——「ロング」というのは川と川の合流点ですね。「サン」というのはサン川ですね。そこにある村に行っただけです。

もつとよく調べようともちろん思っただけでも、一回荷物をとりに帰って、もう一回来ようと思った。ところが、あそこのロング・サンという村から下流のミリまで帰ってくると、四日間ぐらいかかるんですが、船賃を払ったら、大阪まで来ちゃうんですよ。そのぐらい船賃が高いんです。だから、もう二度と戻れなくなる。いろいろそこで調べて、いろいろのことを聞いたり経験したりしました。

その次は、もう少し東のほうのテジャン川ですね。そこで、今度はまた別の川をずっと上っていった——あれは皆さん、ひじょうに楽しいですよ。二五万分の一ぐらいの地図をくりかえし見て、今度はこの川の支流を遡ってみよう、今度はこっちに行こうと、そんなことを考えながら、ああでもない、こうでもないと考えて、そして船に乗った。

船は狭いから、こうしているだけで、身動きできないんですよ。西側に船着き場があつてね。じっとしているんです。二日も三日も小さくなっている。じゃあトイレはどうなるかということ、土地の人は、こんな缶をもっているんですよ。トイレに行きたくなったらそれにするんです。女の人でも缶をもっているんですよ。それで一日また船に乗る。船に乗ると舟はぐらぐらと揺れて、

陸の人が川の人になる。「オラン・スンガイ」。「オラン・スンガイ」というのは「川の人」ね。そして一日ずつとコトコトコトと上っていくんです。

途中で降りて村に行つて、村というのはたいてい河岸段丘のところにある。そこに入っていくと、斜面を入っていくことになるが、そこに頭蓋骨があつたりしてぶつかりそうになる。ぶつかつても相手は死んでいるからいいけどね（笑）。そういうことで毎日過ぐす、あれはどのくらいだったかな。とにかくそこで村から村をまわつて調査をやつた。

ところが、言葉ができないでしょう。これが困っちゃうんですよ。だけど、しようがない。最初にラオスに行つたときは、『タイ語三〇時間』という本を、大阪外語大学の富田「竹二郎」さんという人が書いたところだったから、それをもらつて、もうとにかく頭から最後まで暗記です。「サワディーカップ」というところから始まるんですよ。その『タイ語三〇時間』、もう丸暗記したんです。

そして今度はラオスに行つたらラオス語を覚えなくちゃならない。ヴィエンチャンでラオ語の先生をしている人に、彼はロフさんというミッシヨンの人だけれども、ロフ・アンド・ロフ「という名前」で、夫婦で本を書いている。その本を借りて、ペンで全部写したんです。そうしたら、ロフさんが、自分の本を読んでくれてありがたいけれども、書き入れするなというわけだ。それ

から、ページを折っちゃいかんというんです。だけれどとにかくそれを読んで、ノートして、本をかかえて村まで行ったんですよ。

ぼくのつもりでは、村に子どもがいるでしょう。ぼくが泊まっている家の子どもを前に座らせて、ぼくがこっちにいてその本を讀んで、「サンバーイ・デー」とか言ったら、その人が「あんたら発音悪い」とか言うだろうと思っていたんです。ところが、実際にやってみて、子どもを前に座らせていろいろその本を讀んでみると、子どもは一言も言わない。じつと座っているだけなんですよ。だから、このやり方じゃアラオス語を憶えるのは無理だなと思って、一対一の勉強はやめにしてやったんです。

今度はマレーシアに言ったら、『スピーク・マライ』というラジオで放送していたマレー語の教科書があるから、それをまるっきり丸暗記で覚えて行った。そうしたら言葉が通じるかといふとなかなか通じないけれどもね。だけど、他にしようがないじゃないですか、一人ですからね。村の家に行つて「こんにちは」と言つて、「あんたのところの家族は何人ですか」、「あんたはどこに生まれましたか」とか、そんなかんたんな文章だったら、すぐ憶えますよね。それで家から家をまわつていろいろ調べた。

ボルネオ内陸には頭蓋骨があるんですよ。網のなかに一〇ぐらい頭蓋骨が入つていて、それが自分の頭の上にあるんですよ。怖いという人がいるかもしれないけれども、怖いと言つたつて自分

でそこに来たんだからね。しようがない。頭蓋骨というのは、「死ぬ」ということが人間にとつてどういう意味があるかということ、目の前で見せてくれているんですよ。ぼくはそういうことは嫌いでもなく、好きでしたけどね。ボルネオの内陸では、そういう「死ぬ」ということが、人間にとつての鏡ですね。「死」というのはなにごとかということが、言葉ではなく、頭蓋骨を通じて迫ってくるわけです。それが一つの大問題。

もう一つは、あそこはたいへんな遊びの文化があります。ぼくが泊まっていると、毎晩のように酒を飲んで歌を歌つたり踊りを踊つたり。刀を抜いて、踊れつて迫るんですよ。踊れと言つて、床を踏んで踊るんだけど、やり直せと言つてたいへんでした。山刀をふりまわさないといけない。すると不思議なことに、踊りは踊れ踊れつて言うけども、歌を歌えとはけつて言わない。どうしてだろうね。ぼくは歌が下手だということがわかつていたのかね(笑)。感心した。言わないんです。ぜつたいに言われたことがない。踊りは言うんですよ。刀を抜いて、「やつ」とこややつて踊れと。ぐるりと回つて、「もうちよつと床をドンと叩け」とか言うんだけど、歌えとは言わない。

それから酒ね。酒を飲まして、飲むでしょう。こぼしちゃいけないつて言うんです。そうすると、飲むほうは一人だけれども、ついでくれる人は村人全部だから、いくらでも相手がいるわけです。つぎからつぎへと飲んでいたら、酔っぱらつてくる。わけ

がわからなくなる。そうすると、いろいろな境界がなくなるわけですよ。自分とケンヤ族とか、男とか女とか。そういう境界がなくなる。そのところはひじょうに——自分と人間との境界もなくなるかもわかりませんね。自分と村人の男とか女とか、村長さんとか、女の人でも境界がなくなる。べつになくなってどうってことはないけれどもね。女の人でも、みんなクリスチャン・ネームで呼び合っているんですよ。ジュリアンとかアガタとかね。そういう名前で呼んでいるんですが、もつとエキゾチックになる。

お酒を飲んでフラフラになって、女性が煙草を吸ってそれをほくの頬にぐいっと押しつけるんですよ。あつちもこつちも。このごろ子どもを虐待するっていうんでそういう新聞記事が出てるけど、ぼくは何十年も昔に虐待され通しですかね（笑）。痛いですよ。やっぱりぎゅつとやったら頬が焼けるからね。そうして男性と女性の境がだんだんなくなる。そして夜遅くなって——遅くというのは午前二時、三時、四時ですよ。そうになると、男の若者が広間いっぱいになって寝ているんです。そこに行つて電気をつけると、そういう男たちがいっぱいいるでしょう。そうして一緒に女性がたいへんな力で腕を引っ張っていく。こつちの男たちのあいだに寝かしてもらおうと言うんだけれどもね。ぼくも調査に行つたんだから、そういうことはできないので、なんとかかそういう場所から逃れて帰ってきた。そういうことで何週間たったかな。

それで、帰りに、香港から飛行機に乗ると、そのサン村だとか、その他の村の男性、女性の親切というか、心遣いというか、自分の民族とか部族とかを超えた人間としての親しさというものがせまってきたね。台湾海峡を飛行機が越えるときは涙が出てきました。止めどなく涙が流れた。こういうこともまだ書いていなくてもいいけれども。

スリランカ・インドの調査

つぎに、ぼくはスリランカに行きたいと思つたんです。それでスリランカに行つたんです。南部にアダムズ・ピークという山があるんですが、その近くの麓のほうに行つた。そこは仏教地帯ですね。そこに行つていろいろと見たり、聞いたり考えたりした。それから半年ぐらいたつてから、北のジャフナ¹⁷というヒンドゥー地帯に行つた。どうしてかと言うと、多神教というか、神様がたくさんいるというのが好きだったんですね。そうすると、むしろのヒンドゥー寺院に行くと、その周りにたくさん神様がいます。一〇いくつも神様がいます。その神様に頭を下げて、また真ん中で頭を下げた。「神様がいます」というのはどうということかということを考えていたんです。

そこで、もう少しちゃんと勉強しようと思つてね、ジャフナ・カレッジというのかな、学校に行つてね。その先生に「ヒンドゥー教の勉強をさせてくれませんか」と言ったら、そうしたら女

の先生が「あんたタミル語と言うけれども、まったく知らないでこれからやるんじや、間に合わないでしょう」というのです。ほくももっともだと思ったから、タミル語の勉強はしなかった。しないでどうしたかという、島のまわりを、あそこは海岸ですから、ぐるぐる歩き回って、あるいは小さい島に行っている話聞いた。また海と波と舟を見て砂の中の石を拾っていた。

この「話を聞く」っていうけれども、たくさん言葉を知っていたらたくさんわかるかという、それでもないですよ。言葉というのは、一つしか知らなくても、それに対応する世界の切り口というのは、それだけにわかってくるものです。だから、ヒンディー語なんか知らなくても、知らないなりにわかるし、言葉というものをどういうふうに身につけるかというのは、ほんとうに考えちゃうんですね。身を捨てるというのでしょうか。

ラオスに行ったときに、一軒一軒、九九軒まわったけれどもね、その家に行つて、「あんたの子どもはいくつですか」と言うとお父さんが、「あんたいくつと思うか」って言うんです。いくつと思うかといわれたって、ぼくがわかるはずないじゃないかと思うけれどもね、ひよっとすればそれがわかるかもしれない。本当の年齢がね。村人は暮らしているんじゃないですか。子どもの歳がいくつだとかなんとかということが、数字でわかったからつてたいしたことないんですよ。だから、言葉というものはだい

じだけどね、やはり限界があるんです。それから、言葉でわかることはたいしたことではないという側面もあるんですね。

まあ、そんなことで、スリランカであちこち行って勉強する——だいたい北のほうに二か月行ったら、また南のほうに行つてまた北に行くというような具合でやっていたんですが、とてもおもしろかったですよ。あまり報告を書いていないじゃないかというけれども、いま東工大（東京工業大学）の関根「康正」君、慶応大学の鈴木「正崇」君というのといっしょに行つたんです。彼らはひじょうにフィールドが得意だからね。ぼくがシャーマンならシャーマンに聞くと、彼らのそばにいるわけでしょう。そうすると、彼らがぼくよりもずっとよくノートするしね。そういう人といっしょにしていると、こつちはやることがないですよ。でも、とってもおもしろかったです。

そのつぎはインドに行こうと思った。マドラス「チェンナイ」に行つて、それから飛行機でムンバイ、それからその北のほうのマウント・アブーという山に登つてね。登るつたつて車で行つてくるんですけどね。それでいろいろ調べるといふけれども、こちらが聞いてむこうが答えるというんじゃないで、こちらが聞かないのにむこうが答えてくれるということもあるじゃないですか。調査というのは、半分以上それかもしれないですよ。無言の答え。

それで、マウント・アブーという山に登つて、あそこはジャ

イナ教の聖地ですけれども、ずいぶんいろいろなことがわかりました。だから、地理学というのは、ぼくは土地の学問だつていうけれども、そんなものがほんとうかどうかわからない。道元という人は、「人は地面の上に座っている。しかし、人によっては、空を地とする世界もあるべきなり」と言っているんですね。ぼくは道元が好きだから、空というものが自分の住んでいる世界のいちばん基礎にあるということを考えたつていいわけですよ。たしかにそういう世界がある。

晩年のフィールド調査と思索

それからまたあとで大谷大学の人といっしょに行きました。今度は最後にタイに行つたんですよ。そうしたら、タイで、チェンマイからずつと北のいなかに行くと、スズメ、ノック・カチエーというんですが、その小鳥が籠に入っている。お金をいくら払うと、その籠を開けさせてくれるんです。そうするとスズメがバタバタと飛んでいくんです。籠に入っていたスズメがバタバタと青空に飛んでいく。それで終わりかというのと、どうも見てみると、あるところまでは飛んでいくでしょう。もう一回そこで、「ああ、自分の故郷に、ふるさとに帰ってきた」とスズメが言って、それですつとまた上つていく。だから、二段階になつていく。二段階のスズメの飛び方を見てみると、ああ、スズメが自分のふるさとに帰つてよろこんでいるなということが、よくわかる

んですよ。人間も楽しくなる。

そういう「空を地とする世界もあるべきなり」ということも、だんだん考えついて楽しんでいる。それで、いろいろ考えたらきりがないんですわ。大雑把に言えば、ぼくは地理学の本流というのは、フンボルト、リッター、あるいは著作物で言えば『コスモス』とか、そういうものが出発点になつて勉強したんです。ところが、それだけじゃないんです。それだけじゃないのは何かというと、仏教なわけですよ。道元と親鸞と言うけれども、親鸞は難しくわからん。難しくてね。親鸞の弟子で親鸞のお嫁さんでもある恵心尼「一一八二—一二六八？」という人がいるでしょう。その恵心尼が書いた文書があつて、それを送つてくれた人がいてそれを読んだら、なかなかよく書いているんですね。だから親鸞よりも奥さんのほうが、文書について言えば、よくわかるように書いてくれている。素直に思いを述べている。

一つはやはり地理学、もう一つはそういう仏教が合体して、自分の世界をつくりたいものだなと思つているんです。いまでも思つているんですけれどもね。だから、「あなたの足下にあるのは地面か」と言われたら、それも必ずしもそうとは言えないんですよ。空かもわからないし、水かもわからないし。土地かも分からない。とにかくわからない。ぼくもいつの間にか八〇歳をすぎたから、わからないのがあたりまえかもしれない。

そんなことで私は道元がとても好きなんです。

そういうことでやってきたんですが、じゃあこれからはなにか見通しがあるかというところ、あまり見通しはないんですよ。ほんとうに。いままでやってきたこと、子どもの遊びとか人間の死とか頭蓋骨とか、雲の流れとか。すべてをもう一回やってみようと思っっているけれどもね、なかなかできないんですよ。

それで、一つ、これはパ・タン村というラオスの北の村にいたとき、毎日そこで朝起きて食事するでしょう。食事してから、一人で村の周りとか田圃のなかとか、あるいは川むこうの石灰岩の山の麓とかをぶらぶら歩いていた。そうすると、村の人が「あんたあんたところに行かないほうがいい」と。「トラがいる」と言うんですよ。だけど、ぼくはそこでトラが怖いということは、なぜか不思議に全く思わなかったんですね。だから、時々そこまで遊びに行っただけでも、トラにはあわなかったけれどね。そのころ自分を捨てていたのかな。

それで、そういう田圃のなかにちよつとした木立があつて、その真ん中をぶらぶら歩いていたら、ふつと出合うものがあつたんですよ。これはなんだろうと思つたんですが、なんだろうと思つて文字で書くわけにいかないからスケッチして、持って帰つて村の人に「これはなんですか」と尋ねたら、最初は「リエン・ピーだ」と言つたんです。「リエン」というのは、なにかの供え物をするということですね。「ピー」というのは「スピリット」でしょう。だけど、別の人がそれは違う。「ホー・ピー」の「ホー」

というのは小さい、したがってホー・ピーは「小さい家」ということだということです。ピーの家で、そのなかに神様がいる。神様はいつもは天に居るけれども、天から来てしばらくして天に戻っていく。その神様に供え物として、ケイトウ「鶏頭」の花を二つ供えてある。あるいはケイトウの花二つと糯米の団子が供えられている。私は毎日のように行ってよく物思いしていた。

これはおもしろいと思つた。なぜかというところ、神様は来てまた戻るわけでしょう。日本の神様と同じなんですよね。お祭りがあつてね。社があつて神様がいて、年に一回神様がやってくる、また帰っていく。村の人は、一年に一回、あるいは二回、六月にお祭りをする。そういうことで、日本の神様とひじょうによく似ている。それを調べてみたいものだと思つて、自転車に乗つて近隣に聞いてまわつた。

一方その村の上流部に行くと、この社が二つあるんです（一村二社）。それから、この社のなかにこういう神様がそのシンボルか——これは二つあるでしょう。いるところといないところがあるんです。ラオスの北部でいろいろ村から村に行つて、できるだけ調べた。つぎにはメナム川ぞいの上流部の村ですね。ビルマに近いメーコン村というところで、同じようなことを調べたんです。つぎにカンボジアの北部に行つて、そこで同じことをやりました。あそこでは、「カトウムニヤ・ター」というんですけれどもね。「ネアクター」という神様について調べた。

調べると言っても、これは神様ですよと言ったって、だれもそうですかと言わないじゃないですか。だから、自分が神様にどこまで近づくかということが、神様について調べる場合にいちばん大きな、だじな問題ですね。自分がどこまで近づくか。自分が薄い紙になって神様にどこまで近づくかって、神様の方から近づけないからね。それが問題なんです。近づいた証拠はどこにあるか。証拠はあると言えはある、ないと言えない。それを調べて、次はボルネオでもそういうことを調べたんです。次はスリランカに行って一神か多神か、一神と多神の関わりを調べました。

まあ、そんなことで右往左往ということですね。右往左往と何十年間か、ああでもない、こうでもないということをやってきた。今日までいまだこれだということに思い当たらないわけですね。こちら側にカミはいないのでからね。カミは知識じゃない経験です。でもそれじゃあ困るじゃないかと言うけれども、たしかにそれじゃあ困る、じゃあ他の道があったかという、なかったと言わざるを得ないよね。ないからある。

質問と応答

松本 すこしフロアから、発言してもらいましょかね。それでは、あまり時間もとれませんけれども、なにか、いまの話で、二・三だけ、ご質問なりございましたら、どうぞお願いしたいと

思います。

小林茂（大阪大学） 先ほど先生とロビーでお話をしていたときに、先生は最初に『日本文化のふるさと——東南アジアの稲作民族をたずねて』という本をお書きになりましたね。

岩田 あのね。東南アジアの、稲作している村の至る所に日本のふるさとがある。そこにも、ここにも、日本文化のふるさとがあった。われわれが見て、それを経験しなければいけない。

小林 とにかく、私は学生のころそれを読みまして、いまでもよく憶えているんですが、なにか日本文化のふるさとをたずねるという発想は、先生はそれ以後ほとんどなされなくなりますよね。文化の系統とか、そういうものに対するご関心は——。

岩田 系統というのはないんじゃないですか。自分が尋ねたいたる所にそれがある。

小林 でも、『日本文化のふるさと』という本をお書きになったのに、それ以後は、そういう問題意識は今も続いていますか。

岩田 あれはたまたまそういうものを書いてみようと思ったからね。そのつぎに書いたら、「日本文化のふるさととはなかった」と書くかもわからんしね。あんまり言葉にこだわらない。それから、日本文化のふるさとなんていうことを調べても、そのときは調べたいと思うから一所懸命調べたけど、いまになってみれば、自分のふるさとわからない人が、どうして日本文化のふるさとがわかるだろうと思うね。大事なのは「人間のふるさと」を

つきとめることでしよう。

小林 いや、私どもは、先生が最初に『日本文化のふるさと』という本をお書きになってから、日本文化のふるさとについて探究されるのをやめてしまわれたわけですね。それはなにか心境の変化があったんじゃないかと推測するんですが。

岩田 心境はいつも変化しているからね（笑）。だから、日本文化のふるさとが日本にあるというのはほんとうだろうかけれども、日本文化のふるさとがラオスにあるというのもほんとう。日本文化のふるさとがボルネオにあるというのもほんとう。日本文化のふるさとに至るところにある。アフリカに行ったらアフリカがふるさとだと言うかもしれないね。それがいいんじゃないですかね。神様だって、多神教というのは、こっちも神様がいる、こっちにもいる。じゃあ、どれがほんとうですかって、そんなことはほんとうに多神教のことを考えている人は聞かないですよ。だって、神様のことは神様に聞けばいいんでね。代わりに人間が答えるまでもない。

小林 もう一つ、先生に常々おたずねしたいと思っていましたのは、『草木虫魚の人類学』という本がありますけれども、あそこは、竹でできた家の中で、屋根が竹で壁も竹で、そのなかで先生が夜休んでおられるという話が出てくるんですが。

岩田 そうそう。屋根も全部竹で、そこに大きなクモがバタバタって走っていくんですよ。ぼくが下に寝ていると——ぼくはクモ

大嫌いなんだ。それでどうしようかと思っただけでも、でも何日かすると、あまり気にならなくなった。

小林 あそこで書いておられることは、なんと言っているのか、調査のときに、ほんとうにそういう心境だったんでしょうかと言いか——なにかばかげた質問で申し訳ないんですが。

岩田 あのね、人間だからさ、行く先々でそういう心境になるけどね。その心境になったというのは、ほんの表面的現象でね。心境のもう一つむこうになにかがあるでしょう。もう一つむこうにもあるでしょう。またもう一つ向こうというように、タマネギの皮をむくように訪ねていくんですよ。宗教学というのはそういうものですわ。仏教があつて、そのむこうになにかあるだろう。自分というものを考えて、その自分とはなんだろうと。そのなんだろうというのはなんだろうと、果てしないです。果てしないじゃ困るわけけれども、やはりそういう果てしないことを求めながら、人間の——なんて言うかな、方向なしに、親しみというものをだんだん深めていくわけじゃないですか。わかって調べるということはないです。

小林 先生はあのととき竹に共感されていたわけですか、そうするのと。

岩田 そんなことはないですよ。NHKで竹についてしゃべれって言うからね（笑）。だからしゃべっただけでね。ぼくは、今は道元の道を歩んでいるだけです。とても比較はできないけれど

も、夢かうつつか——。今日はどうもありがとう。

三 岩田慶治の語りのかなたにあるもの

岩田慶治はたいへんな勉強家、読書家である。ただ、それをこ
とさらに誇示することなく、ときには人を煙にまくような、その
場その場に応じた、あるいはその時の状況に柔軟に対応しなが
ら、あえて非日常的な豊穡なる精神世界や環境に身を投げ出しな
がら、自説を貫き通したひとでもある。図書館の文献しか入手で
きなかつた戦中の混乱期に、学徒動員での兵役を挟んで、旧制大
学の卒業論文の執筆にむかわざるを得なかつた事情、その初期の
成果が戦後の混乱期に刊行されていることなど、同じ時期に大阪
市立大学地理学教室の草創期を担った水津^{すいづつ}一朗「京都大学・奈良
大学名誉教授」とともに、共通点が多い。

岩田は従軍経験については多くは語らなかつたが、欧米の社会
学、哲学、人類学、宗教学、地理学などの先端の研究動向や、そ
の当時に古典となりつつあつた著作を縦横に読み込み、膨大な読
書ノートをつけている。若いときからあつた絵心も影響して、ノ
ートに絵画や模式図などでそれを表現しながら、思考を深化、拡
大させていったことも特筆できる。この研究会での鼎談でも、ス
ケッチブックを片手に思いついた絵柄を示しながら、川喜田二
郎、大島襄の二氏と対話していたことが印象的であつた。

その語りの一部を取り出しながら、アジアという世界をどうみ

ていたかを以下に列挙してみよう。

ボルネオ内陸には頭蓋骨があるんですよ。網のなかに一〇ぐ
らい頭蓋骨が入っていて、それが自分の頭の上にあるんです
よ。怖いという人がいるかもしれないけれども、怖いと言っ
たつて自分でそこに来たんだからね。しようがない。頭蓋骨
というのは、「死ぬ」ということが人間にとってどういう意
味があるかということ、目の前で見せてくれてるんです。
す。ぼくはそういうことは嫌いでもないから、好きでしたけ
どね。ボルネオの内陸では、そういう「死ぬ」ということ
が、人間にとつての鏡ですね。「死」というのはなにごとか
ということが、言葉ではなく、頭蓋骨を通してせまってくる
わけです（東南アジアのフィールド調査）。

この「話を聞く」っていうけれども、たくさん言葉を知って
いたらたくさんのがわかるかというのと、そうでもないで
すよ。言葉というのは、一つしか知らなくても、それに対応
する世界の切り口というものは、それだけにわかってくるも
のですよ。だから、ヒンディー語なんか知らなくても、知ら
ないなりにわかるし、言葉というものをどういうふう^うに身に
つけるかというのは、ほんとうに考えちゃうんですね。身を
捨てるというのでしょうか（スリランカ・インドの調査）。

岩田慶治は自然と非自然、柄と地の対象への考察から、自らが対象に没入する自己参与を主張し、草木虫魚も人も融合する風景を描いた。それは西洋の自然と人間を二項対立的に認識する方法とは根本的に異なり、欧米の文化人類学やヨーロッパの近代地理学方法論への異議申し立てでもあった。フィジオノミー（相観学）やシンクロニティ（同時性／共時性）をもったアニミズム論がその彼方にあつたといえる。

右の語りにもその片鱗が鋭く見え隠れしている。相手（他者）の立場に立ち、共感・間主観性をことさら重視する。

日常では見えない原生林を岩田は「非自然」と命名している。その対語が半自然、いわば飼い慣らされた自然、植生でいえば二次林である。人間は思考とコミュニケーションのために作りだした言葉によつて社会的に制度化された文化的意味を「自然」という現象に与え、あるがままの自然を文化的のフィルターを通して見ているという立場の風景論がその基礎にある。それを終生追いつめ、アニミズムや中国から伝来した禪宗のひとつ、曹洞宗・道元の思想を「柄と地」というキーワードに落とし込んで昇華していった。

まずは「柄」だけ（第一段階）、ついで「柄」と「地」——この地を余白と行ってよい（第二段階）、その次に「柄」が「地」に包まれていく——東洋画のように余白が絵を包む（第三段階）、そして最後の「地」ばっかり——いや「柄」と「地」が、「ほんとう

の自分」と「ほんとうの自然」がたわむれている（第四段階）という動的な構図を描いていった²⁰。これが長年の熟考の果てにたどりついた風景の表象でもある。岩田慶治とは、私たちが知っている世界はどのようにあるのかという問いを終生自分に厳しく果たし続けてきた生身の人であつた。しかも「遊び」という襦まじを入れすることも忘れずに。

主要著作

『日本文化のふるさと——東南アジアの稲作民族をたずねて』角川書店、一九六六年。

『東南アジアのこころ——民族の生活と意見』アジア経済研究所、一九六九年。

『カミの誕生（世界の宗教10 原始宗教）』淡交社、一九七〇年。

『東南アジアの少数民族』日本放送出版協会、一九七一年。

『日本文化の起源』角川書店、一九七五年。

『人類学的宇宙観（岩田慶治・川喜田二郎対談）』講談社、一九七五年。

『草木虫魚の人類学——アニミズムの世界』淡交社、一九七六年。

『コスモスの思想——自然・アニミズム・密教空間』日本放送出版協会、一九七六年。

『カミの人類学——不思議の場所をめぐる』講談社、一九七九年。

『人間・遊び・自然——東南アジア世界の背景』日本放送出版協会、一九八六年。

『自分からの自由——からだ・こころ・たましい』講談社、一九八八年。

『道元の見た宇宙』青土社、一九八九年。

『花の宇宙誌』青土社、一九九〇年。

『日本人の原風景——自分だけが持っている一枚の絵』淡交社、一九九二年。

- 『アニメズム時代』法蔵館、一九九三年。
 『岩田慶治著作集』講談社、全八巻、一九九五年。
 『わたし』とは何だろう―絵で描く自分発見』講談社、一九九六年。
 『死をふくむ風景―私のアニメズム』日本放送出版協会、二〇〇〇年。
 『木が人になり、ひとが木になる。アニメズムと今日』人文書館、二〇〇五年。
 『森林・草原・砂漠―森羅万象ともに』人文書館、二〇〇六年。

注

- (1) 野間晴雄「河野通博が語る戦中期から戦後における日本の中国地域研究と国際交流の足跡」、関西大学東西学術研究所紀要、第五〇輯、九七―一九頁、のなか(九八頁)で吐露している。この時期の日本の地政学に関しては、故・久武哲也(もと甲南大学教授)らが文部科学省の科学研究費等を使って先鞭をつけて、さまざまな存命の当時を知る研究者にインタビューしている。その後、柴田陽一『帝国日本と地政学―アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践』清文堂出版、二〇一六年、高木彰彦『日本における地政学の受容と展開』九州大学出版会、二〇二二年、の著作がその経緯を詳しく記載・考察している。
- (2) 浜田明範「存在論的展開とエスノグラフィ―具体的なものの喚起力について」立命館生存研究、第一号、二〇一八年、二一―三二頁。
- (3) 大きくは三部に分かれ、その主要目次は次の通りである。序―赤裸の人として世界と遭遇し自己を再発見するために「編者」、第一編 研究―岩田慶治の仕事とその継承、プロローグ 五〇年目のラオス―岩田慶治調査村を再訪する「松本博之・池口明子・岡本耕平・野中健二」、第一章 非自然(ほんとうの自然)を描く―感性の論理にむけて「松本博之」、第二章 岩田慶治の存在論的人類学のアクチュアリティ―(柄と地) 理論と自己「参与」

「関根康正」、第三章 岩田慶治の「宗教」と「宗教文化」―離見の眼をめぐって「長谷千代子」、第四章 今日の岩田慶治―柄と地をめぐって「西垣有」、第五章 岩田慶治「自分学」の地平―岩田慶治著作集月報』より「松本博之(編)」。第2編 臨地(フィールド)―岩田慶治の世界を写真で読む「写真・岩田慶治／文・松本博之」。第3編 人生―関係資料、【資料1】略歴および海外調査歴、【資料2】岩田慶治著作目録(抄)、【資料3】「岩田慶治先生追悼シンポジウム」フライヤー、【資料4】「岩田慶治を語る会」記録、あとがき「編者」

- (4) 野間晴雄「河野通博が語る戦中期から戦後における日本の中国地域研究と国際交流の足跡」、関西大学東西学術研究所紀要、第五〇輯、二〇一七年、九七―一九頁。

- (5) 野間晴雄「樋口節夫が語る「朝鮮研究」の先達者と業績―解放前と解放後」、関西大学東西学術研究所紀要 第五五輯、二〇二二年、六九―八九頁。

- (6) その内容が岩田と同じように学徒出陣で兵役にしたがい、後に復員復学し、同じ一九四六年九月に旧制で卒業し、また同じように、新設の大阪市立大学法文学部講師に着任したのが、水津一郎(一九二一―一九九六)である。水津は一九五九年から京都大学文学部史学科地理学講座助教授として織田武雄教授と教室運営をする。ふたりは卒業論文がいずれもオーストラリア、ノーザン・テリトリーの乾燥地帯に住む狩猟採集民のアボリジニーの一部族であるアルンタ族をとりあげている。一九世紀末からすでに人類学者の報告としてよく知られ、何よりもデュルケムの『宗教生活の原初形態』(一九一〇)がアルンタ族のトーテムをとりあげたことが大きく作用している。古野清人による翻訳も当時できており、広く知識人には膾炙していた。戦時体制下で、図書館にある文献からの地政学的研究を強いられた京都大学地理学教室の時代の産物であったという側面もある。その卒業論文の全容が、岩田の『森

林・草原・砂漠』(二〇〇六)の第一部「アルンタ族の地域について―地域の意味について」である。水津の卒業論文「トーテムズムと地縁性―未開社会の地理学的試論」は、『古文化』(大八洲出版)の一号のみの雑誌に掲載されている。なお、同じ号に、織田武雄(「ブント考―世界最古の航海に就て」、藤岡謙二郎(「歴史的都市の平面形態」、谷岡武雄(「かいと(垣内)と村)も掲載され、京都大学出身の史学者である林屋辰三郎、奈良本辰也、あるいは京都を中心に在野で石造美術を研究した川勝政太郎などの論考も掲載されている。この京都市の出版社が柳原書店となる。

(7) ロバート・レッドフィールド(一八九七―一九五八)はシカゴ大学出身のアメリカの人類学者で、人類学の対象が小規模で孤立した未開社会に慣らされてきた反省から、ラテンアメリカの農民社会、とりわけメキシコのテポストランやマヤなどを事例に、村と州などとの広域の間のつながりのなかに民俗社会があることを指摘した。岩田や水津の砺波・五箇山調査にもその視点が反映されている。文明という大きな伝統ななかで小さな伝統の社会をみる手法である。

(8) レイモンド・ファース(一九〇一―二〇〇二)はニュージーランド生まれの社会人類学者で、ロンドン大学(LSE)の人類学の教授を長く務め、多くの弟子を育てた。イギリスではマリノフスキーに人類学を学び、マオリの経済活動が社会現象と深く結び付いていることを明示した経済人類学の萌芽的な手法、南太平洋ソロモン諸島内の離島ティコピアの民族誌や双系出自集団、マレー漁村の研究などで、機能主義の立場から経済、宗教、価値体系の分析を試みた。日本でも入門書が『民族学入門』(一九四三年・慶応書房)が翻訳され、人口に膾炙していた。

(9) 岩田慶治「砺波地方における双分組織の問題」人文地理、第八巻五号、一九五六年、一九一―三六頁。同「砺波文化の地域的秩序―ひとつの仮説的試み」人文研究(大阪市立大学)、第七巻九号、

一八一―三五頁。砺波地方は平野部と五箇山などの山間部を含み、いずれも近世は金沢藩領であった。

(10) 一九二三年設立の旧制の富山高校(現在の富山大学文理学部)である。

(11) 一六六五(寛文五)年に東本願寺の学寮を始源とする大学で、真宗学・哲学、歴史学を中心とした文科系大学。鈴木大拙、和辻哲郎などの著名学者が教授として在任し、曾我量深、金子大栄、山口益等などの仏教思想家・仏教学者を輩出している。制度的には一九二二年に旧制大学令による設立である。

(12) 岩田は京都大学時代に嵐山の天龍寺内の塔頭である慈濟院に兵役を挟んで止宿し、京都の修学院離宮内にある門跡寺院の林丘寺にも深い思い出を残している(岩田慶治、二〇〇六年、「地理学の歩みと仏教」(二八三―二九一頁))。

(13) 松本信廣(一八九七―一九八一)は慶應義塾普通部(旧制の中学と高校)を経て、慶應義塾大学文学科(史学)を卒業、普通部の教員に採用された。一九二四(大正一三)年に東洋学研究所のため、フランス・ソルボンヌ大学へ留学し、マルセル・グラネやマルセル・モースらと交流し、フランスで日本人初の東洋学者としての国家学位を受ける。その後、慶應義塾大学文学部助教授に就任するとともに、柳田國男に師事し、柳田が主宰した「郷土会」「南島談話会」「にひなめ研究会」「稲作史研究会」などにも積極的に関わり、日本神話と南方の神話との比較研究から南進論を主張した。戦後、日本民族学協会理事長、日本歴史学協会委員長、東南アジア史学会会長を務め、東南アジア(とくにベトナム)、沖縄、日本の歴史、民族、宗教、言語、考古学などに先駆的な業績を残した。

(14) 東南アジア稲作民族文化総合調査は松本信廣を団長とした戦後では最も早い時期の海外調査である。期間は一九五七年九月から翌五八年四月までの八か月間で、タイ、ラオス、カンボジアを訪

問している。

- (15) 綾部恒雄(一九三〇—二〇〇七)は、岩田や石川榮吉、蒲生正男、祖父江孝男らに続く、第二世代の文化人類学者である。当時、文化人類学の専門課程のあった東京都立大学博士課程在学中に、カリフォルニア大学ロサンゼルス校に留学した。九州大学教授、筑波大学教授を歴任したほか、浄土宗系の家政学園が一九九四年に京都文教大学を設立すると、副学長として文化人類学科の創設にも貢献した。アメリカ人類学の理論や手法を幅広く紹介したほか、東南アジアの文化人類学(タイほか)や文化人類学の入門書も数多く刊行し、岩田(第八期)に続いて、第九期日本民族学会会長(一九八〇—八一年度)をつとめた。

- (16) 富田竹二郎(一九一九—二〇〇〇)は大阪外国語学校(後の大阪外国語大学、現在は大阪大学外国語学部)出身で、一九四二年から四年間交換留学生としてタイとチュラーロンコーン大学に学んだ。新制の大阪外国語大学でタイ語科の設立に貢献した。

- (17) スリランカ最北端のジャフナ半島の先端部に位置するスリランカ第二の都市。上座仏教徒のシンハリ人が七割のスリランカにあって、二割を占めるのがインド亜大陸南部からわたってきたタミル人であり、多くはヒンドゥー教徒である。

- (18) 関根康正(一九四九—)は東京工業大学の土木工学出身であるが、当時、大学の教養教育の教員であった川喜田二郎や岩田慶治に感化を受けて、文化人類学をロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)で学ぶ。東京工業大学の文化人類学研究室の助手から、学習院女子短期大学、筑波大学、日本女子大学、関西学院大学などで教鞭をとった。インドにおけるカースト社会論、ケガレ観念と不可触民に関する研究や、近年はネオリベラリズムに抗する(ストリート人類学)を提唱している。第二六期文化人類学会(日本民族学会の改称)会長(二〇一四—一五年度)。

- (19) 鈴木正崇(一九四九—)は慶應義塾大学名誉教授で、文化人類

学、民俗学(民俗宗教、祭祀芸能)、宗教学(山岳修験)や人文地理学で民俗方位などに幅広い研究業績を残した。慶應中等部からの生えぬきで、慶應義塾大学大学院文学研究科(東洋史専攻)に進学。一九七六年、修士課程修了、一九七九年、博士課程単位取得退学。岩田のもとで東京工業大学工学部人文社会群助手(一九七九年)をへて慶應義塾大学文学部に勤務、二〇一五年に定年退職した。

- (20) 岩田慶治『道元との対話—人類学の立場から』講談社学術文庫、一七三頁。

- (21) 野間晴雄編『風景表象の比較史』関西大学東西学術研究所(東西学術研究所叢書第17号・風景表象研究班)、二〇二三年、のなかで、私はイギリスやアメリカ合衆国での wilderness(原生自然、荒野)と wetland(湿地)の風景の表象を考察した(「ウェットランド(湿地)とウイルドタネス(荒野)の風景学—アメリカ合衆国大西洋岸平野とミシシッピデルタ」、五五—一〇九頁)。いずれの用語も、人間の及ばない、あるいは、ひとが避けてきた場所に付されたもので、ひとがそこに没入していく、あるいは一体となるという、岩田のいうような風景ではない。改変・開発されるべき対象、あるいはありままでの保護・保全されるべき対象という二項対立的な用語であった。

IWATA Keiji Talks about Asia —Field's Experience and Self-Portrait—

NOMA Haruo

IWATA Keiji (1922-2013) was among the first-generation lecturers who participated in the first postwar overseas survey of Southeast Asia. His academic background was in geography and he was graduated from the Faculty of Letters of Kyoto University. During the interwar period, when geopolitical theses were required to graduate, he started his research with a literature study of Aboriginal thought in Australia, in which he incorporated Émile Durkheim's sociology methods of religion research and other disciplinary methods.

While looking over the methodology of the German scholars, Carl Ritter and Alexander von Humboldt after the war, he applied their literature research methods in West Africa and Tonami-Gokayama regional research, both conducted in the Toyama Prefecture, at Osaka City University (now Osaka Metropolitan University). Later, he developed his theory of animism based on field surveys and observations in Laos, Thailand, Borneo, and other South Asian countries such as India, Sri Lanka, Nepal, and Bhutan. In his later years, he devoted himself to self-study pursuits.

He worked at the Osaka City University, Tokyo Institute of Technology, National Museum of Ethnology and Otani University, and served as the president of the Ethnological Society of Japan, yet he was a solitary researcher who kept his distance from the currents of the Western cultural anthropology of the 1970s.

From his student days, he had been interested in Buddhism, especially in the philosophy of Dogen (道元), the founder of the Soto sect (曹洞宗). Based on the founder's consideration of the natural and unnatural, pattern and ground, he insisted on self-participation and immersed himself in the subject where plants, insects, fishes, and people were all fused. This thought was fundamentally different from the Western dichotomous perception of nature and man, and it was also contrary to the Western cultural anthropological methodology and European geography of the time. Additionally, he adhered to a theory of animism with physiognomy and synchronicity. Ten years after his death, his work is being reevaluated from the ontological anthropology perspective.

This short article presents oral materials and make some comments and annotates which illustrate Iwata's attitude in the context of his long research history at the Asian Area Studies Group of the Human Geographical Society of Japan in 2004.

キーワード：岩田慶治 (IWATA Keiji), 東南アジア (Southeast Asia), アニミズ (keywords) ム (animism), フィールド調査 (field survey), 文化人類学 (cultural anthropology), 存在論的人類学 (ontological anthropology), カミ (gods), 地理学の古典 (classics of geography), 道元 (Dogen)